職業の苦痛

若杉鳥子

青空文庫

理想は女弁護士

幼少の頃、将来汝は何に成るの？　と能く聞かれたものでした。すると私は男の子の如に双肩聳やかして女弁護士！　と答えました。それが十四五の時分には激変して、沈鬱な少女になって了いましたが、今は果たして違わず女弁護士と迄ならずとも、女新聞記者というお転婆者になりました。

最初は、女権拡張論ぐらい唱え出す意気込みがあったかも知れませんが、どうしてどうして社会は私達に、そんな自由を与えて呉れません。

自分の素養の足りない事をも顧みず、盲人蛇に怯じず的に、逆巻く濁流の渦中に飛び込んだので御座いました。

今思い出すと、怖ろしさと恥ずかしさとに戦慄を覚えます。

幾多の人の親切も誠意も、年老いた父母の涙をも、唯々自らの個性を葬る圧迫とのみ思いました。

自由とか解放とか、然うした世界に憧憬して、煙のような夢の如な天地を想見して、遂に温かい父母の膝下を去ったのです。

果たして自由の世界を発見する事を得ましたでしょうか。

婦人記者となる

社会に出てから、仕事は私にとって、案外困難な事でも御座いませんでした。然し自分の純白であった感情を斯くまで損なわれる事とは思いもよらなかったのでした。

最初に与えられた仕事というのは、名士や夫人を訪問する事で、余り六ケ敷(むずかし)い事とも思われませんが、中中然うでないのです。然し初めの二三日は何の経験もないので、黙って卓子(テーブル)の前にあって、雑誌の切り抜き等をさせられていました。編輯長や主任に対しては、唯々満身敬意の念を持って、御意の侭に働きました。然し想像した新聞社というものは、目の回る程忙しい活気の満ち満ちたものだと思って居りましたにも係わらず、毎日凝(じっ)としているので、苦痛で苦痛で堪えられません。すると、××主任もそれを察して下すって『然うしているのも苦しいでしょうから、何処か訪問して御覧なさい。』と、嬉んで話し相な人を、皆で列挙してくれました。イの一番に伺ったのは、慥か岡田八千代女史のお宅だと覚えています。

訪問難

東京の地理さえも委しく知らず、何でも渋谷の伊達という邸(やしき)の跡と聞いたので、青山の終点で電車を下りました。――今思えば割合に大胆でしたね――そして、伊達跡伊達跡と尋ね廻ったけれども、一向わかりません。

酒屋で聞いても薪屋で聞いても知れません。凡そ二時間も渋谷の野をうろついて、漸く差配

をしている、駄菓子屋のお爺さんに尋ねますと、『その岡田さんというのは何を商売にしていなさるんです。』といった。『美術家、あの絵をお書きになるのです。』お爺さんは此の界隈で有名な識者だそうですが、猶首を傾けて考え込んで居まして、

『それでは、俺の姪にあたるのですが、その亭主が絵師ですから、其処へ行ってお聞きなさい、ナアニ、直き向こうの小さい家です』と親切に教えて呉れました。

日当たりの悪い茅葺き屋根の家です。御免下さいとおとなえば、若い病みあがりらしい妻君が、蒼い顔をして出て来ました。その妻君も『岡田さん――、美術家――』と、暫く考え込んでいましたが、

『その方の奥さんでしょう、小説をお書きになるのは。それならば小説にいつか天現寺橋の辺りとありましたよ』とその橋を教えて呉れました。天現寺橋なんて名前すらも初めて聞くので御座います。漸うにして其のお玄関に辿りついた時は、何しろ二時間も足駄を引き摺ったのでしたから、足袋は切れる足は痛む、馴れないので全身綿のように疲れていました。

問いたいと思う事も口に出ず、思い切って問題を提出すれば、八千代女史は謙虚に、

『私達にはわかりませんで御座います。』とお逃げ遊ばす。それを突っ込む勇気もなければ、術も知らず、唯話の途絶えめ途絶えめを、何処からかカンナの音が響いて来ます。その間の悪かった事はお話になりません。

談話は断片的で社へ帰ったとて、記事になりそうもなく、その焦慮と恥ずかしさが込み上げ

て、座に居堪えないようで御座いました。それでも日頃尊敬していた人に見えた、一種の満足を得て、私は社へ帰って参りました。初めての事で非常に印象強く、どうか斯うか纏めて書きました。

自分を殺してかかる

男の方を訪問するのは割合に楽で、問題さえ提出すれば大抵の方はお話し下さるので、別に呼吸も何も要りませんが、婦人にして訪問記者に応ずる方は、余程解った方でしょう。逢うには逢って下さるが、御謙遜が過ぎて皮肉なように受け取れます。尤も此方が神経過敏になっているせいで、先方でも責任を重んぜられるが故に、無暗にお口をお開きにならぬのでしょう。然し何時お目にかかっても気持ちのよいのは、芸術家、もしくは芸術を解された方で御座いましょう。

広い世間を歩いて見ると、色々な人に出会いますから、自分というものを全然殺してかからないと、此の商売は出来ません。

ある旧華族でしたが、御令嬢にお目にかかりたいと申し出でました。すると、『当家の姫君は新聞の材料には相成らせられぬ。』とある。今時こんな事を聞いてお芝居のようだと、編輯室の一同で笑いました。

斯ういうものは執事の老人が時勢を知らぬので、夫人なり令嬢なりは当代の教育も受けられ

ているし、決してそんな事はあるまいと存じます。それから櫻井ちか子（1）女史を訪問した事が御座いましたが、それも大きに失敗談。女史がタイプライターをせらるる間、三十分許り応接間でお待ち申すと、軈て女史は入ってこられた。

先ず氷のように冷たい瞳の視線に、若い胸を射られて、ジロジロと見られるのが辛くて、居堪えられませんでしたが、自分は今訪問記者であるという自覚を強くして、問題を提出すると、『自分の答うべき問題ではない。』とある。それでは何でもお考えつきの事を、というと、『私は学校の長としても、一家の主婦としても多忙な身で新聞の種子など考えている閑暇はなかった。』という情けない言葉。全く女史の仰有る如く、問題の適不適を考えて持って行くべきでしょうが、此の問題ならあの人は熱をもって話すだろうと思っても、決して然うはゆかぬ場合もあるのですもの。

我侭者も遂に服従

余りの侮辱に堪え兼ねて、一層新聞記者なんか止めて、再び父母の懐中へ帰って、服従の日を送ろうとまで思ったのは、此の時許りでは御座いませんでした。今になって見れば、女史に感謝すべき処が大いにあります。

初めの程は虚栄心に駆らるる事もなく、極く真面目に仕事の事にのみ追われて、一日の中に何物をか得なければ忽ち日刊新聞の事だから、あとからあとからと追われますのみか、編輯上

の都合が悪くなるのですが、丁度留守の処へ行ったり、居ても逢えなかったり、引っ越しの後を追って見ても知れなかったりして、短い冬の日は徒労に終わる事もありました。そんな時は、何時も悄然とした姿をして、小石川の宿に帰って行くのでした。

帰れば何を勉強をする気にもなれず、筆をとる気にもなれず、唯疲れた体躯（からだ）を投げ出して、快い眠りに入る事より他に、何の欲望もありません。労働者の上も偲ばれて、気の毒で堪えませんでした。然し私も一個の労働者です。終日パンを得る為にのみ斯くして過ごします。どう思っても幾ら高く買っても、これが天職の使命のとは思われません。

社内の事よりも何よりも、反抗するに感応（こたえ）のない、大自然の圧迫は、実に苦しく、家庭や長上の人より受くるもののように余裕がありません。流石の我侭者の私も、是には服従せざるを得ませんでした。

生活費の不足

早稲田出身の文学士様さえ、最初の月給は二十円から二十五円と、相場の定った新聞社の事ですから、私は初め見習として十五円を与えられました。電車代は別です。

自給するようになって、生まれて初めて月給を懐中（ふところ）にした時は、嬉しい気持ちよりも、顧みて一ヶ月の自分の労力が余りに安価に購われ、余りに又小さなる自らの力である事を心細く思いました。

十五円の中、

円	銭	
一〇、		食料及び炭，油
	六〇	湯銭
	六〇	郵便
二、七〇		電車券私用分（三十日）
一、一〇		小遣い

と計算立てて見ましたが、此の中から英語の月謝を出そうと思っても出ません。既に郵便の六十銭は不足、一円十銭のお小遣いでは足袋が切れても、下駄が悪くなっても買えません。それに半襟が汚れるとか化粧品を買うとか、臨時費が多く出ますから足りる筈がありません。書物も買えず勉強も出来ない、これでは仕様がないと思って、知り合いの妻君に相談しますと、東京の生活は百円でも出来れば、五円でも出来るという。食料の方から月謝位出そうなものですねと云いました。

それから直ぐその素人下宿を退いて、神田の裏長屋同然の家へ行きました。元、郷里（くに）の家に居た下男が独身で世帯を持っているのです。其処へ同居してから自炊もして見ました。その男はかなり忠実な人で、夜の中に水を汲み込んだり、薪の用意もして呉れまして、夜の明けぬ中に労働に出て了います。

雪の日にも風の日にも、私は社から疲れて帰って、かじかんだ手で鍵を開けて、真っ暗い家の中に入り、ランプを灯して、此度は火を起こしにかかるのです。馴れない為に幾ら起こしても消えて了う。終には自棄になって、石油をかけて火をつける、随分危険な乱暴な事をしたものです。

そんなに迄しましたが、遂に勉強の暇は得られませんでした。

下男は口癖のように、お嬢さんはお可哀想だと云っていましたが、遂に見兼ねてか私の生活の状態を、郷里の家へ知らせてやったと見えて、それから充分に金子も送ってくれましたし、衣服等も汚れれば直ぐ郷里へ送り返すと、新しい着替えを送ってくれるというようになりました。衣服の汚れる事、いたむ事は、それはそれは甚だしいので、母に始末をたのむのが気の毒のようで御座います。

然うなって来ると、丁度空腹の人が食を得て眠くなるように、却って身の為になりません。その後逐うとう惰弱に流れ、虚栄は募る、物質欲が増長して、安逸許りを求めて、自己の修養などは、とんと忘れて了いました。

洗濯物すら素人の手では気持ち悪く、貴婦人達にはお友達が出来る。高価、月給の一割もするクリームが塗りたく、男のお友達も出来たりして、一時私は全く虚栄を夢見て、軽佻浮薄な日を送りましたね。

けれどもその後幾変遷、私という女は又当時の人と変わりました。

要するに、新聞記者雑誌記者は、幾ら文明になって来たと云っても、今の日本では婦人に困難な仕事で御座いますね。第一服装からして不便な事はお話になりません。米国あたりは知らぬ事、いまの日本の社会は幾十年、婦人が新聞界で奮闘して見たところで、苦しい経験を山のように積んだ処で、相当の地位を与えてくれる見込みは到底ありません。

私の初めの大理想は何処へやら消滅して、元気なく丁度、一旦泥水に浸みた女が、足を洗えずにもがいているようなもので、矢ッ張り相変わらずの日を過ごして居ります。

それでも『婦人は実力以上に買われる』という余徳あるが為で御座いましょう。

然し実力以上に買われるとは、何たる侮辱された言葉でしょう。決してそれを潔しとは致しませぬ。

要するに婦人の職業と云うことは、まだまだ範囲が狭いのみならず、殊に筆を持って立とうとなさる方は、なお更生活の途の苦しいと云うことを覚悟して、陣頭に立たれたいと思います。

注：（1）桜井女学校長

青空文庫情報

底本：「空にむかひて」武蔵野書房
2001年1月21日初版第1刷
底本の親本：「女子文壇　第七年三号」女子文壇社
1911（明治44）年2月発行
入力：林　幸雄
校正：小林　徹
2001年3月19日公開
2011年11月27日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

職業の苦痛

若杉鳥子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/